
大和撫子、舞い踊らん

ハヤブサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大和撫子、舞い踊らん

【Nコード】

N 8 2 9 5 W

【作者名】

ハヤブサ

【あらすじ】

ある夜、ヴァンパイアと少女は出会った。

ヴァンパイアは昔の恋人を失った空虚で満たされていた。少女は母の願いを叶えるため、大和撫子を目指していた。そんな二人が月夜に舞い踊る。

ハヤブサが奏でる情の話

至高なる騎士

「高貴なる闇の支配者よ。」

背後から声がした。私はゆっくりと振り返った。

そこには、可憐な和服を着た少女がいた。夜桜を連想させる着物。どこかに見覚えがある。どこで見ただろうか…。

「私に、何のようかな？」

私は読んでいた本を閉じながら微笑むと、少女に訊ねた。その声に少女は微かに笑った。

「愚問ですね。貴方は龍神をも従える夜の支配者ですよ？」

そう言いながら少女はどこからか刀を抜いた。月光に輝くそれは命を奪う冷徹さも備えていた。

「私が求めるのはただ一つ。」

「貴方の命です。」

少女がそう言うより早く、刀を振りかぶって襲いかかってきた。

「夜を紅蓮に照らせ！バジエスト！」

刀を炎を帯び、私の命を奪おうと向かってきた。

「甘いぞ。」

私は瞬時に相手の懷に飛び込んだ。そして、袖を掴むと柔術の応用で吹き飛ばした。

「くっ！負けません！」

少女は華麗に着地すると、再び向かってきた。

「業火の花よ、咲き誇れ！レイバティン！」

彼女の手から鋭い業火の槍が吹き出た。

……やる。この少女。

業火をここまで束ねて放つのは至難の業だ。生半可ならば爆発してしまうのがオチだ。それをすっかりまとめている。

……… ともに受けたら、私と言えど厳しいか。

「水よ、万物に憩いを与え給え！ ジュフグラン！」

私は両腕から水を出した。それは槍となって業火の槍に当たる。ポフンツ、と蒸発する音がした。

……くっ、霧が……。

「てああっ！」

突然、少女は声を上げながら霧から現れた。裂帛の気合いを感じさせる刀の一振りが私を襲う。

「やはり、甘いな。小娘。」

私はひゅつと指を引いた。

「収束せよ。」

水が空中で凍り、氷の槍となって少女の斬撃を受け止め、彼女の脇腹を穿った。

「きやあああっ！」

彼女は悲鳴を上げて倒れ込んだ。

私は咄嗟に彼女を支えた。

「大丈夫かい？」

……… 返答がない。意識が飛んでしまったようだ。

「……… やれやれ少しやりすぎてしまったかな？」

私は少女の脇腹に治癒の術をかけると、身体を担ぎあげて街の方に歩いて行った。

私は街の宿舎のベッドに少女を寝かせると、彼女はう……と呻いて目を覚ました。

「ああ、目が覚めたか。小娘。」

私が言うつと、彼女はハツとしたような顔になってベッドから跳ね起きたが、顔をしかめて膝をついた。

「まだ、痛むだろう。少し休め。」

「……私は、負けたですね。」

「ああ。」

私はそれだけ言うつと、読みかけの本を取り出して読み始めた。

「……お願いがあるのですが。」

「聞くだけ聞く。」

顔を少し上げて彼女を見ると、少女は悩みながらといった様子でそれを口にした。

「私を…弟子にして頂けますか？」

「……弟子、だと？」

さすがに私も驚く展開である。さっきまで私の命を狙っていた少女が私に教えを請おうなど……前代未聞である。

「はい、強くなりたいのです。」

少女は真剣な眼差しで私を見て言った。

悪くはない。私はふと思った。

真剣に強さを求める者に教えを説くのもまた一興であろう。

「分かった。ついてこられるのであれば、な。」

私はそう言うつと、再び本に目を落とした。

「ところで、貴方様……いえ、お師匠様のお名前は何と仰るのですか？」

私は再びの驚きで思わず本から顔を上げてしまった。

「小娘、私を高貴なる闇の支配者と呼んでおきながら私の名を知らぬのか？」

「はい。風の噂で少しその名を耳にただけでございます。」

「では、私の身の上も？」

「はい。」

何と言つことか。向こう見ずにも程がある。

「その前に小娘、お前の名前は？」

「私ですか？私は水恋スイレンと申します。」

「スイレン…変わった名だな。だが、いい名だ。」

私が言つと、水恋は嬉しそうに笑つた。

「お褒め頂き感謝致します。お師匠様のお名前は？」

「ああ、私か？私は…。」

私は優雅に本にしおりを挟んでパタンツと閉じながら言つた。

「紅蓮グレン、至高ヴァンパイア夜の騎士だよ。」

至高なる騎士（後書き）

ハヤブサです。

真面目に書いてみたものです。

吸血鬼はわりと好きです。

特に、理不尽に迫害を受けているもの。

悪魔や亡者。

彼らにもちゃんと理はあるのです。

それを書き記したい。

そんな一心で書く話です。

さあ……大和撫子、舞い踊らん！

疾風の槍の使い

「お師匠様、どちらに向かわれるのですか？」

少女……水恋は私の後ろを歩きながら言った。

この少女、私がヴァンパイアということも知ってもついてくる。

それほど力を欲している、ということだろうか？

「そうだな。」

私は空を見た。月が煌々と輝き、私達を照らしていた。

「北の方にケロスという村がある。そこに行こうと思う。」

私が言うと、水恋が軽く頷く気配が伝わってきた。

「傷は痛まぬか？」

「大丈夫です。」

「無理はしなくても良い。つらくなったら言ってくれ。」

「はい。」

私達は時折、言葉を交わしながら北への道を歩んだ。

ケロスに着いたのは、東の空がぼんやりと明るくなってきた頃だった。

私は村の中を歩いていくと、ある家の前で足を止めた。

「……ここのお宅は？」

「ここは、我が旧友の家だ。」

私はそれだけ水恋に言うと、ドアの右下をガンと蹴飛ばしながらドアノブを掴んでドアを押した。

と、その途端に、私のドアのすぐ脇の壁がドアのように開いた。

「……………え？」

水恋は呆気にとられたような顔をしていたが、私はそれに構わずに壁に空いた穴に入った。

「水恋、入らないのか？」

私がそう言うと、彼女はハツとしたような顔になって慌てて穴か

ら入ってきた。

入ったのを確認すると、私は壁を閉じた。

「もう少しで家の住民は起きてくる。」

「……あの、今のは？」

水恋はまだ驚きが隠せていない顔で私に訊ねた。

「ああ、ドアはカモフラージュで本当のドアはこっちなんだ。泥棒避けらしい。」

「……すごいですね。」

水恋が呟くと同時にがたと二階で音がした。そして、ドスドスドスツと階段を誰かが降りてくる音がする。

「ん……お嬢さん、どこから？」

寝惚けた声を出す青年が現れた。

「こっから。」

「うわわわわっ！」

「そんな驚くな。同志よ。」

「んな、こと言っても突然、天井からぶら下がって来られたら驚くわ！」

「そりゃそうか。」

私は予想通りの反応に満足して、トスツと床に着地して彼を見た。

「久しいな。疾風の槍の使い、ロキ。」

「ああ、相変わらずだな。高貴なる闇の支配者、グレン。」

私達はがっしりと握手をした。

その光景を水恋はポカンとした顔で見守っていた。

「待つてろ。珈琲をいれる。どっかに腰掛けてくれ。」

「ああ。」

彼の声には私は返事をする、水恋の手を引いてソファーに腰掛け

た。

「あの……あの方は？」

「言っただが？疾風の槍の使い、ロキ。私の同志だ。」

「如何にも。で、そこのお嬢さんは？」

「あ、はい、水恋と申します。グレン様の弟子です。」

「ほー、こんな若い女の子を誑かして。」

ロキはくつくと笑いながら珈琲を配った。

「あ、ありがとうございます。」

「熱いから少し冷ましてから飲めよ。」

私は予め忠告して珈琲を啜った。

「あ、つまんねえ！これ反応待っていたのに！」

水恋はきょとんとした顔をしている。

「えと……。」

「分からないなら飲んでみるがいい。だが、覚悟しろよ。」

私は少し微笑んでそう言っていると、水恋は恐る恐る、と言った様子で珈琲を口に運んだ。

「あひっ！」

水恋は奇妙な声を出した。若干、涙目だ。

「何ですか。これ……。カップはそんなに熱くなひのに、中は熱湯じゃないでふか。」

「おいおい、ア行が八行になっているぞ。」

私は少々面白く思いつつ、珈琲を口に運んだ。

その脇でロキはげらげら笑っていた。

「いや、ごめんな。そのカップは超耐熱カップなんだ。中身は百度以上の熱湯。」

「でも、沸騰してひなひじやなひですか。」

まだ八行のままだ。

「ああ、ちよつと術を掛けてね。」

「こいつは炎の術が旨いんだ。もちろん、その異名通り、風もだが。」

私が言うと、水恋は私を睨めた。

「おいおい、そんな目で見えるな。私は止めたぞ。」

「そうそう。ほら、火傷の薬。」

ロキは相槌を打ちながら、彼女に水薬の瓶を渡した。

水恋は少し疑うような目でロキを見た後、その瓶の蓋を開けて薬を飲んだ。

「あ……治った……。」

「で、グレン、何のようだ？」

ロキは真面目な顔になって私を見た。ふう、と私はため息をつきながら言った。

「忘れたか。予言を。」

「あ……。」

私の一言でロキは思い出した。

「魔鬼婆のか。なるほど、それで俺の所に。」

「ああ。」

「すぐに支度をしよう。」

ロキはそう言うのと、奥の部屋に引つ込んだ。

「……なんですか？予言とか魔鬼婆とか。」

水恋の問いに私は教えるべきか少し悩んだが、正直に話そうと思つて口を開いた。

「予言についてはもっと詳しい人物に会いに行く予定だからその時に話す。魔鬼婆は魔鬼という魔法を使う鬼を統率する婆さんだ。奴とは関わりたくないが……今回は行かねばならない。」

水恋は私の説明に腑に落ちないような顔をしていたが、ロキが入ってきたので気が逸れた。

「よし、準備はしたぞ。……なんだ？その顔は？」

「えと……多いですね。荷物。」

その質問は当然だ。荷物はトランクが三つに風呂敷が二つ、それにポーチに槍とかなり多い。

「まあな。」

「だが、これが必要なのだ。」

ロキと私がそう言うのと、外に出た。

「え……ヴァンパイアって日光がダメなのではないのですか？」

水恋が続いて出て来て言った。

「それは迷信だ。案ずるな。」

……とは言っても日光は苦手だが。

ロキは風呂敷とトランクを全て開いた。中には鉄の塊がいくらか入っている。

「水恋、組み立てるのを手伝ってくれ。」

私が言うと、鉄塊を出して組み合わせ始めた。

「え、あ、はいっ！」

数分間、私と水恋、ロキは鉄塊と格闘した。

「よし、出来た。」

私はふうと息をついた。

目の前には鉄の乗り物が出来ていた。

「魔戦甲と言つてね。さ、乗つて。」

ロキは乗り込んで水恋に手を差しのべた。

水恋はその手を握って乗り込むのを確認してから私は乗り込んだ。

「じゃ、行くぞ！」「おう！」

魔戦甲は私達を乗せて進み始めた。

強さは人が決められず

魔戦甲は私達を乗せて順調に進んだ。

行く手を阻む魔物もはね飛ばされるばかり。

やがて、私達は森に入った。

「ここは、鬼の森ですね。」

水恋の声に私は頷いた。

「ああ、魔鬼には気をつけねばなるまい。」

「大丈夫だつて。魔鬼だつて公道には出ねえよ。」

ロキは呵々と笑って請け合った。しかし、私の目はその暗闇を見据えて呟いた。

「いや、どうかな？」

目の前に三体の魔鬼が通せんぼしていた。

「うそっ！……こんなに早くやりたくはなかったけど。」

ロキは言いながら魔戦甲を止めた。

私達が下車すると、鬼が喋った。

「我々はここを人間が通ることを望まない。早く去るべし。」
ふう、と私はため息をつきながら魔戦甲の車体を叩いた。

……良い機会だ。

「水恋、戦ってみよ。」

「はいっ！」

水恋は着物の帯に差した刀を抜いて前に出た。

鬼達は唸って水恋の方に向かってきた。

「いいのか。助けなくて。」

「いや、いい。必要が迫れば私が灼熱ス。」

「うわ、本気かよ。余程あの子を買い被^{マジ}っているんだな。」

「見れば分かるさ。」

水恋は鬼らの攻撃を捌きながら上に舞った。

「業火の花よ、咲き誇れ！レイバティン！」

彼女は業火の槍を空中に作りだして鬼に投げた。が、鬼は動じずに腕で身体を庇った。

「うん、確かに魔力の調節能力は半端ないね。だけど……鬼にはそんな術は通じないね。」

ロキは冷静に判断する。まさにその通り、槍が炸裂した鬼の身体は傷一つ無い。

だが、水恋は落ち着いていた。

「吹雪よ、万物に眠りを与えよ！ハリアムーン！」

水恋の着物が風ではためいた。全身から、吹雪が出ている。その吹雪は鬼らを包み込んで凍らせんと呑み込んだ。そして、鬼らは丸ごと凍結された。

魔力の放出具合がすごい。訓練すればもっと使えるはずだ。

「……まさか…百花繚乱？」

「なんだそれは。」

「いや、なんでもない。」

ロキの態度を不審に思いながら、私の記憶の中に『百花繚乱』という台詞をインプットした。どこかの図書館に行った時に調べよう。

「何にせよ、私は解き明かすだけだ。この世界を。」

「飽きないね。この世には知らなくていいものもあるんだぞ。」

ロキの声を無視して、私は水恋の元に向かった。

「お師匠様！やりました！」

「さすがだ。私が見込んだだけはある。」

私は少女の長い髪の毛を撫でた。嬉しそうな顔をする水恋。だが、その顔に少し翳りが入った。

「ん……どうした？」

「あ、いえ、なんでもありません。」

再び笑顔をつくる水恋。無邪気な笑顔が可愛い。

……そう言えば、可愛い、などの感情を思ったのは何年ぶりだろうか。

「ん、どうかされましたか？お師匠様？」

「いや、なんでもないさ。さあ、行こう。」

そう言っと、私は魔戦甲に乗り込んだ。他の二人も乗り込んで再び発進した。

「グレン、カ。クカカカ、向コウ見ズガマタキタ。」

そんな声がしたのは…きつと……気のせいではない。

私達はハーダルという街に着いた。

「ここにもう一人仲間がいる。」

私はそれだけ言っと、ある石造りの家に向かった。ノッカーでコンコンとドアを叩くが、反応がない。

「おかしいな。あいつはいつも昼はいる。」

ロキも不審に思ったようだ。視線を滑らせると、ある少年に目を留めた。

「な、君。ここの住民はどこにいるか知らないか？」

「あ……。」

少年が何か言う前にロキは疾風のように少年の手にチップをいくらか握らせた。

「……内緒だけどね、ここの人はお城に連れ去られたの。」

「ああ、ありがとう。」

ロキは十分な情報を聞き出すと、私の方を向いた。

「どうする？」

「うむ、乗り込もう。」

「ちよちよちよ、ちよつと待って下さい！城ですよ？何の策も無しに飛び込むんですか？」

水恋が慌てて言うが、私の心が決まっている。

「あいつを救うためなら、手段は厭わん。」

「こいつはな、冷静で利己的な感じだけど、実は向こう見ずな性格でね。考え無しなんだ。」

「言い過ぎだ。少しは考えはある。」

私は言いながら城を見据えた。そして顎に手を当てる。

「じゃ、なんだ？」

「乗り込んで連れ出して逃げる。」

ロキはため息をついた。水恋も目を丸くしている。

……そんな変な考えだったか？

「だろ？」

「そうですね。」

なんだ、二人して私を蚊帳の外にして何が楽しいんだ。

「わーった。たまにはいいかも知れねえな。その強引な策も。水恋ちゃん？」

「あ、はい。」

ロキは紙と筆を取り出すと、バババツと何かを書いた。

「これを量産して城で花火が上がったらこれを思いっきり撒いてくれ。」

「分かりました。」

「何を仕込んだ？」

「事実の裏付け。これだったら城主も文句は言えない。」

ロキは意味ありげにニヤツと笑った。まあ……彼に任せておけば大丈夫か。なんだかんだで信頼における存在であるし。

私は一息をつくと、抜刀した。

「行くぞ。ロキ。」

「おうよ、グレン。」

二人の豪傑は地を蹴って城に駆け出した。

ヴァンパイアの怒りは計り知れず

「冰雪よ、分厚き幻想を穿て！ローガブラスト！」

私の術が魔術が掛かっていた城門を吹き飛ばした。

「て、敵襲――――！――――ッ！」

兵士が警鐘を鳴らすのもお構いなしに突き進んでいく二人の男。

城内に侵入すると三十人程の兵士が槍を突き出して向かってきた。

私はその様子を見てフンと鼻で笑いながら言った。

「ロキ、正しい槍の使い方を教えてやれよ。」

「言われなくても。」

次の瞬間、全ての光景がスローモーションに見えた。が、私がヴァンパイアだからそう見えるのだけであって、常人の目で見たら普通の速度で見えたであろう。

と、言うことはロキの槍捌きは見えなかったに違いない。

「うああああああああああああ！」

兵士達が一塊になって脇に吹き飛んだ。

ロキのやったことは単純だ。槍を振り回して一気に薙いただけなのだから。

私とロキは猛進して地下に向かった。

地下牢には人が蠢いていた。端からロキが覗き込んであいつがいるか確認していく中、私は向かってきた兵士の相手をしていた。

「む、剣術がなくていいいな。ほれ。」

しかし、兎戯にも等しいな。雑魚過ぎる。

「ロキ、まだか。」

「いや……。」

「面倒だ。」

私はそう呟くと、魔力を込めて剣を薙いだ。

バキバキバキッ！

地下牢の檻が全て崩れ去った。中で啞然としていた囚人は我先に

と雪崩を打って外に出て来た。

「……いない？」

私は目を走らせながら言った。

「ああ、つてことは地下牢じゃない？」

「まさか、あいつ、側室にでもされたんじゃない。」

「な・ん・だ・とーーーーーッ！」

高ぶる感情が抑えきれない。怒りが高まる。

「……………灼熱ス。」

「わ、止める！グレン！」

ロキの声が響いた。しかし、ふつつと腹から湧き上がってくる感情の激流は止められない。

「灼熱よ。」

私は指を天空に伸ばした。

「ノバロカイデル
焼き殺せ。」

次の瞬間、全身から灼熱の炎が出た。

「ぐあああああああああああ！」

兵士が焼け死んでいく。ふ、良い様だ！クハハハ！

「死ね死ね死ね！俺の邪魔になる奴は塵芥に消えろ！」

くスイレンく

ゾクツ…………と悪寒がしたのはロキさんに渡されたプリントを魔法でコピーしていた時だった。

……………失敗、していないよね。

「うわあっ！城で火事だ！」「謀反だっ！」「逃げる逃げる！」

水！」

阿鼻叫喚が聞こえてきた。私は堪らず城の方に駆け出した。城からは紅蓮の炎が立ち上っていた。

……おかしい。石造りの城があんなに燃えているなんて。

『水恋ちゃん！』

耳元で何かが叫んだ。いや、むしろ、頭に直接言語を送り込まれていると言った方がいいかも知れない。とにかく、何かが叫んでいる。

『俺だ！ロキ！グレンが暴走しちまった！』

え？何？暴走？

『奴を止めるにはあいつしかないんだ。俺はあいつを探すから水恋ちゃんは奴の抑制を！』

「え、ちょ！」

私が叫んだ時には、ロキさんはもう交信を断っていた。

仕方ない。

私ははあ、とため息をつく、と、ビラをしまい込んでから城の方に駆け出した。

「水の精よ、我に力を貸し給え！レーヴァヴァンダ蒼天の氷牙！」

術が私の腕からはじけ飛んだ。

氷牙が降り注いで城の炎を弱めていく。

「これっきりですよ？」

私は苦笑して呟くと、近くのベンチに座り込んだ。

くろキ

くっ……どこだ？

俺は目をこらしながら駆けた。

もし、俺の推測が正しければ、あいつは王の側室に勧誘されたは

ず。だが、あいつのことだ。すぐに拒否したに違いない。だから王は誘拐した。

これなら、辻褄が合う。だが……どこだ？

「風の使者よ、風に耳を傾け我に伝えよ。フーデエリエン。」

煙の中、俺は冷静に術を唱えた。

途端に、よく周りの音が聞こえてきた。

………ある。呼吸の音が。

俺はその音を頼りに煙幕の中を駆け抜けた。空気を浄化する呪文で魔力がだんだん減っている。時間はない。

ようやく俺はそれらしき部屋の前に着いた。

「てあああああああああああああああああああ！」

飛び膝蹴りでバコンと部屋の扉を吹き飛ばす。そして勢いで部屋の中に転がり込んだ。

「あ、ロキ、久しぶり。」

俺はのんきな声に転けそうになった。

部屋の中には城主らしき人を縛って遊んでいる女性がいた。

「ミレーヌ！グレンが暴走した。」

俺の一言でこの状況を把握したようだ。

「これ、本気出さないとまずい？」

「ああ、俺も力を貸す。地下牢だ。」

俺とミレーヌは言葉を交わしあうと、呪文を同時に詠唱した。

「地の戦士よ、地を穿ち我を導け！ヴーグリンプ！」

「風の使者よ、我を優しく守り給え！ググランダ！」

ズドドドドン！

すさまじい勢いで床が抜けていく。

その穴に俺たちは飛び込んだ。

「誰かが干渉を掛けているおかげで城はまだ崩壊していないわ。」
ミレーヌの言葉に僕は何か引っかけた。

……一体誰が？

自治体の人や消防部隊は手を貸しているだろうか……こんなバカでかい城を倒壊の危険から防げるのはそれなりの力を持った人間でなければ……。

まさか……水恋ちゃん？

そうこうしている間に、もっとも高温の場所、地下牢に到達した。

「く……熱いわね。」

ミレー又は言いながら目をこらした。

俺も探そうと目をこらした瞬間に胸に鋭い痛みが走った。

「う……ごふっ！」

口から血が吹き出る。しまった。魔力を使いすぎた。

「ロキ！大丈夫！？ゴホゴホッ！」

ミレー又が激しく咳き込む。吐血したときに集中力が途切れて煙を防ぐ術が解けてしまった。

俺は集中力を高めて再度煙を払うが、もはや魔力はない。

「早く……ミレー又……。」

「分かった。」

ミレー又は呟くと、グレンの姿を見つけて駆けていった。
次の瞬間、俺は気を失った。

ヴァンパイアの怒りは計り知れず（後書き）

ハヤブサです。

今回はグレン、水恋、ロキの三人の視点から行きました。

水恋には隠された秘密があるようです…。

そして、新登場のミレーヌ。

なんだか、城主を縛って遊んでいましたが、その真意は？

……と、これが更新している頃には私はオーストラリアですね。

予約更新ですっ！

暫し、更新が遅れるかもしれませんが、その辺はお許しください。

今回は、ミレーヌの正体が明らかに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8295w/>

大和撫子、舞い踊らん

2011年9月27日01時18分発行